



白夜の森の姫

ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩

この夏、フィンランドの北極圏を訪ねました。そこでサーミ族の工芸を学んでいる友人仲間と、白夜の森を10時間近くも散歩に出かけました。長い道すがら、喉の渇きを潤した小川の水を「森の香りがする」と言う声にはっとしました。そんな詩的な表現ができるのは、森の暮らしを知る北国の人ならではのことでしょう。声の主は、「ラトビアから来たお姫様」と紹介されたマダラさんです。「私、ルンダーレで生まれ育ったの」フィンランドの北の田舎町でマダラさんは言います。「ええっ？ あのお城で？」道理で「姫」と呼ばれるわけです。

蘇える城

ルンダーレとは、ラトビア最大の18世紀のバロック、ロココ建築の傑作とされている宮殿です。首都リーガから南東に車で約1時間ほど、国内外の観光コースに組み込まれている名所です。そこでは例年の夏に中世音楽フェスティバルが開催され、結婚式の披露宴などにも使用されます。前大統領の就任晩餐会や退任レセプションも行われました。

ここは、ポーランド公国の分権を受けて存在したクルゼメ公国(1561年から1795年まで)のピーロン公が建てた夏の離宮です。1736年に始まった建設は、ピーロン公が寵愛を受けたロシアのアナ女帝の死後に流刑となって一

時中断されますが、エカテリーナ二世によって釈放されて再開され、1768年に完成しました。ペテルブルグの冬の宮殿(現エルミターージュ美術館)を手がけたイタリア人建築家ラストレッリによる設計で、ラトヴィア国内では珍しい絢爛優美な宮殿です。

クルゼメ公国は後にロシア帝国下に入り、宮殿の所有者は二転三転します。1920年に国有化され、第一次世界大戦後には戦禍に遭った後、住居兼学校として使用されました。1933年に国立歴史博物館の所有となって修復されました。第二次世界大戦中、破壊は免れながらも倉庫に使用されました。宮殿としての本格的な修復作業が開始されたのは1972年です。

以降、独立法人の博物館として芸術史専門家として信頼の篤いランツマニス館長の監督の下、地道な修復が進められています。私が初めて来た1993年当時、宮殿では公爵の寝室、バラの間、白の間、黄金の間などの一部が公開されていましたが、周囲は廃墟同然でした。それからというもの、訪れる度に修復を終えて新たに公開された部屋を見て歩くのが楽しく、宮殿の周りのバラの庭園が蘇る様子に目を見張ります。野外劇場や花のトンネルなどが美しいフランス式庭園を見ると、そこが雑草が伸び放題の荒地だったともはや想像もできません。



庭園側から見た宮殿



未公開の部屋の修復作業をする技術者たち

女たちが守る城

マダラさんのお母さんは、芸芸員です。若い頃に宮殿に勤務するために、宮殿の横にとってつけたようなルンダーレの村に移り住んできました。この村で生まれたマダラさんは、宮殿を遊び場として育ってきたのです。「宮殿の修復の歴史は、私の成長過程を思い出すようなもの。バラの間の修復が終わったのは、私が中学1年になったとき」。マダラさんは、ラトビアではガラス・アーティストです。

マダラさんのお母さんに、未公開の修復途中のホールや廊下を案内してもらいました。5メートルはある高い天井まで足場を組んで、天井画を修復する根気強い作業が続けられていました。かなりの忍耐を必要とする肉体労働でありながら、技術と繊細さが求められる仕事です。おやおや、修復しているのは女性ばかりです。「どうして？」と訝しがる私に、「どうしてかしらね。修復技術者はいつの間にか女性しか残っていないわ」との説明です。そういえば、庭園の花の手入れをしていたのも女性です。男性の姿を思い出せたのは、切符もぎりのアルバイト風の若い男性でした。

女性が守るこの宮殿には暮らしの営みが漂っていて、どこか確かに平和的です。